

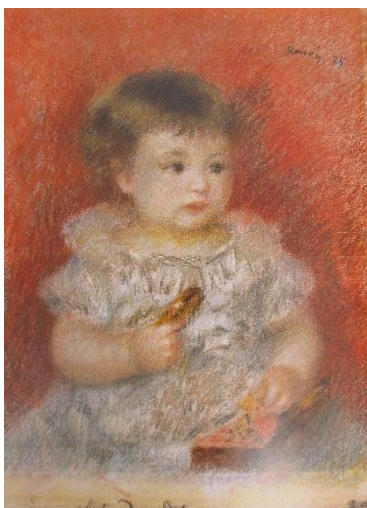
モネ、ルノアール 印象派の光

松岡美術館（港区白金台5） 23.06.20～10.09

「松岡美術館」は、貿易商「松岡清次郎」がおよそ半世紀にわたって収集した室町時代から現代にいたる日本画、ペルシャ陶器に東洋陶器や欧州の石像彫刻、仏教彫刻など多彩な芸術品「およそ1800件」を所蔵している。

松岡翁は「美術品は一般に公開すべきもの」との信念に基づき、1975(昭和50)年に開設した私立美術館で、現在は私邸跡の白金台に移転開館している。

本展は、当館が所蔵している西洋画コレクションの中から「モネ」「ルノアール」をはじめとする、フランス印象派・新印象派の絵画を一堂に会している。ピエール＝オーギュスト・ルノアール《リュシアン・ドーデの肖像》 1879年 作品展示は08月15日より

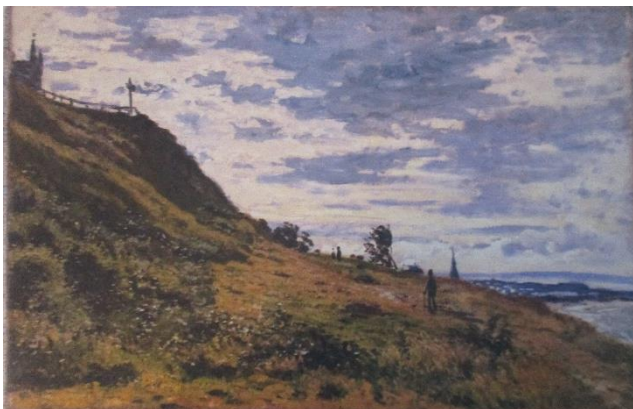


本作品は、鮮やかな赤を背景に柔らかい光を受けた子供の愛らしい表情と仕草が描かれている。

画伯は印象派の中でとりわけ多く人物画の名作を残したことで知られ、パステルの生み出すやわらかな風合いとざっくりとした線によって、幼児の柔らかな肌や頭髪、ギャザーを多用したふんわりとした衣服が忠実に描かれている。

「ルノアール」の晩年作品の特徴は、人物画が多く描かれ、どれも優しくて穏やかな表情をしていて、人物の輪郭も丸くなっていき、特に女性を中心とした明るい作品が多いことである。

クロード・モネ 《サン＝タドレスの断崖》 1867年



画伯がサン＝タドレスの地で生み出した初期の名作のひとつである。斜面が生み出す対角線による空と地の対比構造は、光を浴びる斜面と海の明るさに対比して、画面左手の大きな崖と画面中央右手の杖を持つ人物が作り出す影の存在が一層光の存在を強調している。素早く細かなタッチで、移ろいゆく空と海風に揺れる草花を巧みに表現した作品である。